宇部市の概要

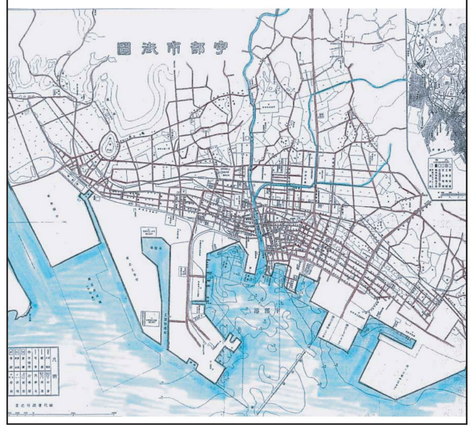
■ 大正１１年の宇部市街地

江戸時代の柳川城下

宇部市は、本州西端の山口県の南西部に位置し、東は山口市、西は山陽小野田市、北は美祢市に接し、南は瀬戸内海に面している。人口は１７８，９５５人、面積は２８７．６９平方キロメートル（平成１７年国勢調査）となっており、気候は温暖で雨の少ない典型的な瀬戸内海気候である。

今日の宇部市発展の礎は、明治期以降の石炭産業の振興を通じて築かれた。市内各所に開かれた数多くの炭鉱では、「宇部式匿名組合」と呼ばれる独特の経営方式により石炭の採掘が行われ、その結果、地元資本の蓄積と関連産業の育成が大きく進展した。こうして人口規模の急速な拡大と飛躍的な発展を遂げた旧宇部村は、大正１０年（１９２１年）１１月、村から一挙に県下２番目の市制を施行した。その後、戦災により市街地の大半が焼失したものの、まちの再建にかける市民の熱意と戦後の石炭景気に支えられ順調な復興を遂げた。

■ 昭和１３年の宇部市街地

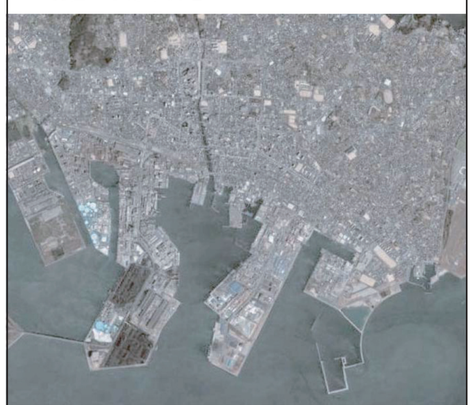


昭和25年の柳川

昭和２９年（１９５４年）周辺４か村との合併を経て市域を拡大したが、やがて我が国の資源エネルギーの需要構造の転換に伴い、多くの炭鉱が閉山を余儀なくされ、昭和４２年（１９６７年）には最後のヤマも姿を消した。その結果、一時は人口も減少し市勢も停滞したが、やがて素材供給型化学工業を中心とする近代工業都市へと転換を図り、瀬戸内海沿岸地域で有数の臨海工業地帯を形成している。平成１６年（２００４年）１１月１日には楠町と合併し、現在の宇部市となっている。

市民生活と健康への影響に大きな問題となっていた降下煤塵対策として、全国に先がけ、市民・企業・学者及び行政の四者が協力した独自の公害対策（宇部方式）により、問題解決に取り組む一方、市民活動が、緑化運動や花壇コンクール、現代日本彫刻展へ発展し、「緑と花と彫刻のまち宇部」をコンセプトにまちづくりを進めている。

■ 現在の宇部市街地



課題対象地区と概要

本ワークショップの課題対象は、宇部市の中心部にあり、中心市街地活性化区域に指定されている。

宇部市がめざす「花と緑と彫刻のまち」としてまちづくりは、地区内における屋外彫刻物と緑豊かな歩行空間、中心を流れる真締川に象徴される。また、渡辺翁記念館や旧宇部銀行、全日空ホテルなど、建築家・村野藤吾が設計した価値ある建築物が立地している地区である。

一方で、人口１７万人の非線引き都市である宇部市では、人口減少社会の到来、モータリゼーションの進展、ライフスタイルの変化などを背景に、郊外における大型商業店舗の立地や開発行為の郊外化が都市的課題となっており、中心市街地の空洞化や商店街の衰退が顕著にみられる。近年では、街なかにおける無秩序な民間マンション建設により、景観問題が噴出している。

また、地区内には、国道１９０号線が通っており、自動車の通過交通が多い。また、地区内には宇部新川駅と琴芝駅があるが、乗降客数は少なく、駅周辺の求心性が弱い状況である。

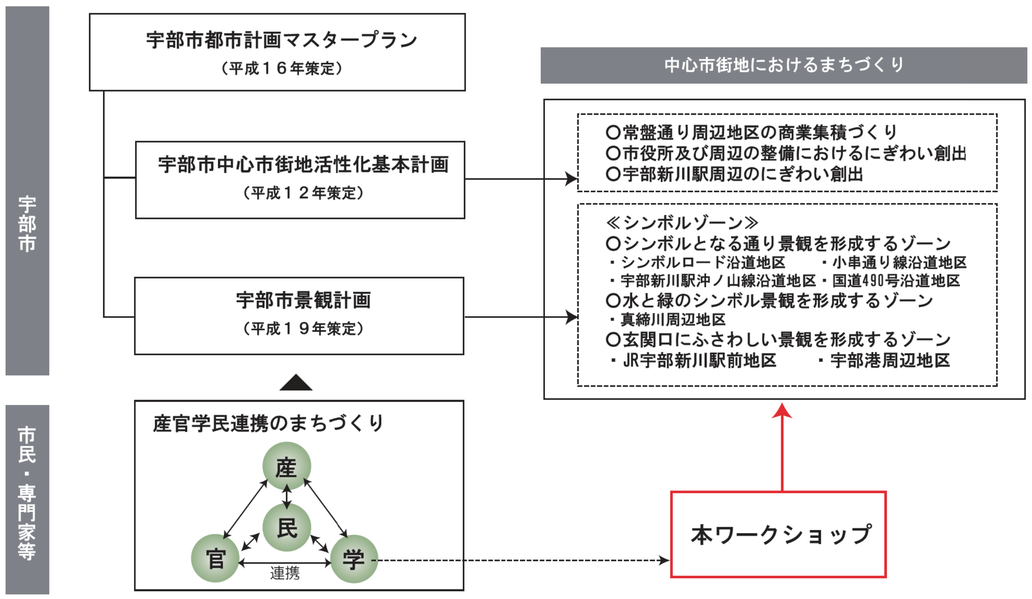
■ 宇部市中心市街地

自治体における取組み

宇部市では、市街地の整備改善と商業等の活性化を図るため、平成１２年３月に「宇部市中心市街地活性化基本計画」を策定し、中心市街地のまちづくりや活性化に取り組んでいる。策定後、中央町三丁目地区まちなか再生事業や宇部新川駅から南にぬける宇部新川駅沖ノ山線の街路整備事業などを実施している。

また、平成１６年の「宇部市都市計画マスタープラン」の策定にあたってワークショップを実施するなど住民参加のまちづくりに取り組んでいる。

平成１７年には景観行政団体となり、良好な景観形成を図るための指針となる「宇部市景観計画」を策定し、平成１９年４月１日から施行している。当該地区を中心に景観計画区域に指定しており、中心市街地における景観まちづくりが進められている。

現在は、村野藤吾氏が設計した旧宇部銀行の保存・活用方策を検討しているところである。

宇部市中心市街地におけるまちづくりのプロセス（提案）